

薬剤師リカレント学習支援プログラム：薬剤師が地域医療を支えるために

藤井 聡,^{*a} 土屋照雄,^b 野口博司^c

Continuous Pharmaceutical Recurrent Education to Support Community Healthcare

Satoshi FUJII,^{*a} Teruo TSUCHIYA,^b and Hiroshi NOGUCHI^c

^aGraduate School of Pharmaceutical Sciences, Nagoya City University, 3-1 Tanabe-dori, Mizuho-ku, Nagoya, 467-8603, Japan, ^bGraduate School of Pharmaceutical Sciences, Gifu Pharmaceutical University, 1-25-4 Daigaku-nishi, Gifu 501-1196, Japan, and ^cGraduate School of Pharmaceutical Sciences, University of Shizuoka, 52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526, Japan

薬剤師を取り巻く環境は激変している。薬剤師としての高度の専門性を発揮する以前に、近年急速に拡大するチーム医療へ参加するために薬剤師に包括的に求められる活躍すべき分野や学ぶべき深度が定まっていない。また、長期実務実習が平成22年度に開始され、医療において薬剤師が果たすべき役割については薬学部教員の関心も急速に高まりつつある。このシンポジウムでは、現場で積極的に活躍しようと希望するこれからの優れた薬剤師に求められるスタンダードは何かについて理解を深め、生涯にわたるリカレント学習の方向性を議論した。行政、教育者、大学の関係者、そしてこれからのチーム医療をとともに担う他職種の方々に講演をお願いし、多様な視点から近未来のあるべき薬剤師像を議論し、各々の立場・強みを活かした薬剤師の生涯学習の方向性をとらえることを議論した。先進事例から学び、様々な立場からの討論を通して早急に解決すべき課題を共有した。

厚生労働省・医薬食品局総務課・薬事企画官の山本 史先生には「薬剤師：多様化・専門化する活躍の場と期待」というタイトルで講演をお願いした。現在、様々な分野における技術進歩と医療の高度化・複雑化、高齢社会の到来、医薬分業の進展等、薬剤師を取り巻く環境が大きく変化しており、その

ような動きの中、薬剤師が活躍する場も専門化するとともに、より多様化しつつある現状を紹介頂いた。このような常に変化する場の中で、薬剤師が期待に応え、医療の担い手として使命を果たしていくためには、何よりも、薬剤師一人一人が、自ら置かれた環境の中で継続的に研鑽の機会をとらえ、必要な資質の獲得・向上にのぞむことが求められていることを強調された。そして薬剤師がそれぞれの場面で求められる役割とともに、生涯教育のあり方を分かりやすく示して頂いた。

薬剤師認定制度認証機構・代表理事の内山 充先生には「これからの薬剤師に求められる生涯学習（継続的職能向上）」と題して講演を頂いた。求められる生涯学習には、すべての関係者が共有すべき目標と行動原則があり、薬剤師は、患者主体の医療に貢献し、地域の保健衛生と生活改善に寄与する責務を負っているが、それを果たすために、卒後の生涯学習により、専門職能（professional）を高め、特定領域での専門性（specialty）を深めるという2つのカテゴリーを念頭に置きながら、自らのキャリア・デザインに沿った目標を定めて学習設計を行う必要があることを示して頂いた。生涯学習の原則は基本的に「自発性」にあり、すべてが「学習者」の観点に立って行われるべきことが、大学教育とは決定的に異なり、生涯学習は、学習者が自分の能力・適性を自己査定することから始まる。それに基づき学習計画を立てるが、そこには将来目指す職域や業務をしっかりと自ら描いていることが望ましいことをお話頂いた。生涯学習は単なる知識の集積ではなく目標の達成のために行うものであり、学習課題の

^a名古屋市立大学大学院薬学研究科（〒467-8603 名古屋市瑞穂区田辺通3-1）、^b岐阜薬科大学大学院薬学研究科（〒501-1196 岐阜市大学西1丁目25番地4）、^c静岡県立大学大学院薬学研究科（〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1）

*e-mail: sfujii@phar.nagoya-cu.ac.jp

日本薬学会第130年会シンポジウムS03序文

選択に用いるスタンダードは、職能発揮の現場の発想に基づく代表的なスタンダードを、関係者が常時討議改訂してよりよいものとし、研修方法、場所、頻度などは、豊富に存在するITやメディア情報の中から学習者が選んで計画する必要があることを明らかにして頂いた。また指導者の優劣は、適切な選択(評価)法を示唆できるかどうかにかかっており、また学習の記録は、客観的に評価(認証)されている各種の「称号」によって証明されて、初めて社会からの信頼を得ることができることを強調された。

岐阜薬科大学・実践社会薬学研究室の杉山 正先生には「薬科大学附属薬局が主催する臨床薬学に特化した生涯教育」というテーマで講演頂いた。岐阜薬科大学の特徴的な生涯教育プログラムを紹介頂き、大学が主催する生涯教育講座、大学附属薬局が主催するリカレント講座、名古屋市立大学、静岡県立大学との共同によるリカレント講座の3つを紹介頂いた。特に大学附属薬局は実際に処方せんを扱う保険薬局で、附属薬局が主催するリカレント講座は、附属薬局の特徴を活かして、臨床現場で薬剤師の業務に活用できる知識の習得を目的とし、薬剤師が係わる幅広い職域の知識や実技指導を行っていること、また講義に対する期待についての受講者のアンケート結果についても報告して頂いた。詳しくは本誌上シンポジウムに総説として記載されている。

静岡県立大学・臨床薬学分野の賀川義之先生には「地域医療を支え、薬剤師の意欲を高めるリカレント教育と大学の役割」と題して講演頂いた。新制度の薬学教育では臨床面の教育が重視され、知識だけでなく技能や態度面の充実を求めている。薬剤師は薬物療法における広範な貢献が期待されており、医療現場の薬剤師には意欲が十分にある。旧制度教育を受けた薬剤師は、臨床関連教育の経験に乏しく、卒後研修によって補ってきた。自己研鑽では体系的教育に欠け不利がある。既卒薬剤師に対し新制度の教育内容を盛り込んだ体系的な卒後教育が重要となり人的及び物的資源を確保しなければならない。薬学部実務家教員や医師教員、6年制教育に合わせて設置された模擬薬局などの資源を有効に活用して講義、小グループディスカッション、実技実習を行い、高い教育成果をあげることが期待できることを強調された。詳しくは本誌上シンポジウムの総説をご覧頂きたい。

地域医療、とりわけがん診療の中で薬剤師には薬剤に関する専門的な知識とともに患者とのコミュニケーション能力が望まれている。静岡県立総合病院・核医学部長の高木正和先生には「地域医療の中で薬剤師に期待すること—がん診療の立場から—」と題して講演頂いた。がん患者はがん発見から根治あるいはがん死に至るまで常に地域にいて、病院は手術、化学療法、緩和医療の振り分け、あるいはそれらの導入を行い、地域の診療所が全人的医療の要の役割を果たすべきであることを話された。この認識の下に具体的に、静岡市内の総合病院と診療所とで地域連携で継ぎ目なく連続的に治療を行うシステムを紹介頂いた。地域の薬局薬剤師は病院薬剤師と同じように抗がん剤の効果と有害事象に関する知識を持ち、患者への服薬指導や有害事象の聴取など患者と十分なコミュニケーションがとれることが要求され、がん診療における地域医療、地域連携の中で薬剤師全体への期待は極めて大きいこととお話頂いた。詳しくは本誌上シンポジウムに総説として記載されている。

名古屋市立大学薬学部、岐阜薬科大学、静岡県立大学の東海地区三公立大学は、東海地区地域連携リカレント教育センターを設立し、既卒の薬剤師のための生涯学習支援講座を企画実行している。名古屋市立大学・東海地区地域連携リカレント教育センターの鈴木 匡先生には「三公立大学連携による薬剤師生涯学習支援の試み」というタイトルでお話頂いた。薬剤師の勤務地や居住地の近くで容易に研修が受けられるように、大学とは別の遠隔地にサテライト研修会場を設営しており、それらの会場と大学をウェブによるテレビ会議システムで結ぶことで複数会場での双方向で同時の研修受講を可能にしていることを説明して頂いた。講義では、科学的根拠に基づいた医療の実践に必要な最新の科学的知識を取得することを目指している一方、実習では6年制薬学部学習のために新しく開発された実習内容をいち早く取り入れ薬剤師実務の実践的な実習を行っていることを強調された。詳しくは本誌上シンポジウムに総説として記載されたのでご覧頂きたい。

このように、本シンポジウムでは臨床現場で求められるニーズを明らかとし、それらをどのような方法で学んで地域医療を始めとした社会の強い期待にこたえていくかが様々な立場から紹介され議論され

た。薬剤師卒後教育は、薬剤師の持つ専門知識の向上だけでなく、実際の医療現場での活躍に結びつくような教育を目指している。これらの試みから、今

後の薬剤師生涯学習の方向性と可能性が大きく広がることを期待させるシンポジウムであった。